

中心発問さえ外さなければ道徳の授業になる！

後藤 忠

道徳の教材の結末（話の終わり方）は概ね次の2種類である。

一つはハッピーエンドの結末、もう一つはブルーエンド（ブラックエンド）の結末である。（この他に、オープンエンドの結末もあるが、指導上取り扱いが大変難しいので初心者にはお勧めしない。）

ハッピーエンドの教材には「2わのことり」や「はしの上のおおかみ」などがあり、ブルーエンドの教材に「きいろいベンチ」や「かぼちゃのつる」などがある。

児童は教材の登場人物に自己を投影し、教材に宿る道徳的価値に心を動かしながら、道徳的価値の理解（自覚）を深めていく。

その理解は価値の大切さの理解に止まるものではない。道徳的価値は大切だと分かっている、人間には弱さがあり、価値を実現することは簡単なことではないことも理解する。さらに、価値が実現できたり、できなかったりした時の感じ方や受け止め方は人によってそれぞれ違うということも理解する。

こうした理解（自覚）を深めるきっかけを作るのが「発問」である。

発問の定義が実に曖昧である

あちこちで道徳授業の研修会が行われ、研修内容が道徳授業づくりに直結して具体的になればなるほど、「講師によって言うことが違う」、「真逆のことを言う」といった戸惑いや疑問の声も多く聞かれるようになった。

また、発問に関する用語も言葉の定義が曖昧なまま使用されている実態がある。

例えば、授業のねらいに深くかかわる中心的な発問（つまり中心発問）のことを主発問と言っているケースが目立つ。

主発問とは、授業全体における主な発問のことで、学習指導過程全般の発問を指す。

中心発問とは、「本時のねらい」に深く迫る発問を指す。

基本発問とは、中心発問が本時のねらいに深く迫り、効果的な発問になるよう中心発問の前後に配置する発問、つまり布石となる発問を指す。

その他、補助発問とは、主発問だけで授業の流れが授業者の指導意図通りに進まなかったり、深まらなかったり、広がらなかったりする時に備えて、予め用意しておく補助的な発問のことを言う。したがって、主発問だけで授業者の指導意図通りに授業が進んでいくなら使う必要のない発問である。いわば「いざ」という時に抜く懐刀のような発問のことである。

中心発問の実態を考える

今学校では主に次の2つのタイプが中心発問として設定されている実態がある。

Aタイプ

- ・ 登場人物の内面が大きく変化する場面
- ・ 登場人物が深く悩んだり、葛藤したりする場面
- ・ 児童から多様な考えや反応が出てくる場面

を中心発問として設定している。

Bタイプ

登場人物の内面が**本時のねらいである道徳的価値の自覚で満ちている**、それも**最も深く、最も強く、最もストレートに、最も純粋に満ちている場面**を中心発問に設定している。

ところで、学校ではAタイプとBタイプのどちらが多用されているだろうか？

私の感覚ではAタイプが6割くらいを占めているように思える。(教科書の教師用指導書の展開例を見るとその傾向が分かる。)

例えば、「はしの上のおおかみ」でのAタイプは、「いつまでもくまの後ろ姿を見ているおおかみ」、「友の肖像画」では「ぼくの間からは涙があふれ、版画がかすんでしまった時の和也」のところである。

しかし、改めて中心発問の役割を考えると、はたしてAタイプでよいだろうかという疑問が湧く。

中心発問は、発問の中で特に深く**本時のねらいに迫る発問**である。つまり主人公の内面が最もピュアに本時のねらいである道徳的価値に満ちている状態を問う発問である。「はしの上のおおかみ」では、おおかみが「小動物たちにやさしい気持ちで接するって本当に大切だな、意地悪をするより親切にする方がずっと気持ちがいいな」と、一番強く、一番深く、一番純粋に思っている場面である。確かに「くまの後ろ姿を見ているおおかみ」の内面にも、「くまさん、カッコイイな。今度くまさんの真似をしたいな」という気持ちはあると思うが、「ウサギに悪いことをしたな、きつねに申し訳なかったな」と反省や後悔をする気持ちも混じっているはずである。

「友の肖像画」も同じで、和也が「正一を信頼し、これからも正一とずっと仲よくし、助け合い、励まし合っていこう」と最も強く、最も純粋に思っている場面が中心発問の場面である。その場面は、和也が「正一の作品を鑑賞している場面」か、「帰りの電車の中でじっと目をつむっている場面」か、「電車の窓から見える青く透き通った空を見ている場面」であって、「ぼくの間からは涙があふれ、版画がかすんでしまった場面」ではないと思う。

したがって、本時のねらいとは関係のない意見や考えが児童からたくさん表出される(ことを求める)発問は中心発問にはふさわしくなく、同じ方向に向かって同じ傾向の意見や考えが多様に出てくる発問が中心発問であると言える。

つまり、授業は「本時のねらい」の達成を目指して行うものであるから、中心発問で多様な考えが拡散的に出てきたのでは、ねらいを達成するための授業にはならない。

したがって、中心発問は授業者によってそれぞれ違うということはほとんどない。「ほとんどない」と言ったのは、教材の中には、稀に「友の肖像画」のように中心発問となりえる候補が複数存在する教材もあるからである。

ここで挙げた教材以外にも、基本的な誤解によって教材の主題のよさが生かされずに扱われているケースが多いと思われる。ぜひ、中心発問についての総検討をしていただきたい。

中心発問を検討する際の手掛かりとなるのは「本時のねらい」であり、「本時のねらい」が中心発問を決める。しかし、その手掛かりとなるべき「本時のねらい」は一般に実に抽象的で漠然としている。このままでは手掛かりとしての役には立たない。「はしの上のおおかみ」では、よく「身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとする心情を育てる」というねらいを立てるが、このままでは漠然としてつかみどころがなく、具体的な手掛かりにはならない。したがって、授業者は確信をもって中心発問を決めることは難しい。

そこで、「本時のねらい」を教材の登場人物に置き換えて**翻訳**することをお勧めしたい。

つまり、本時のねらいを「(おおかみが) **身近にいるうさぎやきつねやたぬきたちに温かい心で接するって**

大切だな、意地悪をするより親切にする方がずっと気持ちがいいな。これからは小動物たちに進んでやさしく親切にしよう」と翻訳し、おおかみがそのことを一番強く、一番深く、一番純粹に思っているところを探せば、授業者は確信をもって中心発問を決めることができる。

基本発問には名脇役を充てる

名人と言われる人の授業は別だが、一般に中心発問だけでは授業は成り立たない。

中心発問で「本時のねらい」に迫るためには、その中心発問を支え、中心発問を光らせる**基本発問**の役割は非常に重要である。(芝居に例えるならば中心発問が主役で、基本発問は脇役といえる)

例えば、先のAタイプで述べた「登場人物の心が大きく変化する、登場人物が深く悩んだり葛藤したりする、児童から多様な考えが表出される」などの発問は極めて有効な基本発問の候補といえる。

効果的な基本発問を設定すると、中心発問で質の高い学習が担保され、道徳的価値の自覚を一層深めることができるのである。その意味で、基本発問は中心発問以上に授業の質を決定付ける重要な役割を担うことができる。しかも、授業時間のことを考えると基本発問の数はせいぜい2問程度に止めなければならない。したがって、的を射た中心発問を決めるより、効果的な基本発問(いわゆる名脇役)を決める方が何倍も悩むし、難しいといえる。

なお、その基本発問の設定には児童の実態、授業者の教職経験、人柄、個性などが反映される。つまり、基本発問の設定は授業者によって異なるのが普通で、道徳授業はむしろそうありたいものである。

そもそも全学級が導入から終末まで、全く同じ学習指導過程で授業を行うことなどありえない話である。

人の「借り物」発問で授業を行うより、荒削りでもいいから授業者が自ら考え、力を込めて振り下ろす鉦のような発問の方がよほど児童の心に響くし、何倍も意味がある。

設定した基本発問が効果的であったかどうかは授業で児童が教えてくれる。児童の反応を鏡にして更なる授業改善に努めればよい。これが授業力の向上に繋がる。

いずれにしても、中心発問さえ外さなければ道徳の授業になるのであるから。

道徳授業の面白さは発問構成の面白さにあると言える。自分で考えた発問で授業を行うと道徳授業は俄然面白くなる。そのことを是非実感していただきたい。

授業には完璧な授業などない。あるのはよりよい授業を求めることのみである。